父母(ふぼ)に孝(こう)に、兄弟(けいてい)に友(ゆう)に

小野田　寛郎

聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

小野田　寛郎 / おのだ・ひろお
大正11年3月和歌山県生まれ。昭和14年春、旧制海南中学を卒業。貿易商社に就職、中国・漢口（現在の武漢）支店勤務。昭和17年12月、和歌山歩兵第61連隊入隊、昭和19年1月、久留米第一予備士官学校入校。同年9月、陸軍中野学校二俣分校で訓練の後、同年12月フィリピン戦線へ。以後30年、作戦解除命令を受けられないまま任務遂行。昭和49年2月、冒険家鈴木紀夫氏（後にヒマラヤで遭難）と出会い、その説得を受け同年3月祖国へ生還。昭和50年春、ブラジルに渡り牧場を開拓、経営。昭和59年「自然と人間の共生を」をテーマに、子供たちのキャンプ「小野田自然塾」を開く。著書に『たった一人の30年戦争』（東京新聞出版局）がある。

佐多：小野田さんがフィリピンのルバング島から帰還されたのは昭和49年3月ですね。戦後約30年間ジャングルで生きてこられたわけですが、一口に30年と言っても想像を絶する世界ですね。

小野田：軍人として与えられた任務を忠実に遂行しているだけ、という感じでしたから。あの状況で生きてこられたのには、生来の負けず嫌いと身体が丈夫なことがあったと思います。それに加えて、生きる目的があったことが大きかったですね。

昭和19年ごろの軍司令部での状況説明から判断して、昭和20年以降日本本土には米軍の傀儡(かいらい)政権がつくられて、本当の日本政府は満州（現中国東北部）にあり反撃のチャンスを狙っていると考えました。

そんな中で、私の状況判断を誤らせる歴史の偶然が続いていったわけです。5年半後の昭和25年には朝鮮戦争が勃発しましたね。私たちは常に偵察活動を行っていたので、マニラ湾の米艦艇や空軍基地の動きが急に慌ただしくなったのを察知して、ついに日本が大陸から反撃に転じたのだと判断しました。

さらには昭和40年冬、米軍の大型爆撃機が連日目撃されたんですが、方角と往復の飛行時間からして仏印（フランス領インドシナ＝現ラオス、ベトナム、カンボジア）だと思いました。それで「米軍がこれほどの戦力を投入するからには、仏印方面で日本軍が再度猛反撃に出たのだ」と確信してしまったんです。これがベトナム戦争の北爆とは知るよしもありません。

佐多：ご自分のことを「残置諜者(ざんちちょうじゃ)」と言っておられますが、これは情報員のことですね。その任務を遂行しようという目的意識が、困難なサバイバル戦を可能にしたわけですね。30年間何を食べて生き延びられたのですか。

小野田：主な栄養源は牛肉でした。任務を遂行するにはまず体力ということで、体力の維持に気を使いましたね。放牧の牛を銃で撃つんですが、銃声を聞かれる危険性を最小限にするのと弾丸を節約するのとで、一発でしとめなければなりません。

牛の群れの中でも、不健康な牛は気づかずにいつまでもウロウロしていますが、健康な牛は臭いなどですぐに殺気を感じてサッと逃げはじめます。そういう牛を撃たなければならないのでこちらも必死です。しとめたらすぐ頸動脈を切って血を出して解体しますが、そのあと発見されないように、一人で45キロから50キロの肉を袋に入れて夜を徹して遠くへ移動するわけです。

最初の2日間はビフテキや焼き肉を腹いっぱい食べます。そのあとはなべで煮てローストビーフにして4日くらいもたせます。残りの肉は保存用で、乾燥させた後要所要所に隠しておくわけです。

佐多：ビーフジャーキーのようなものですね。草や木の実なども食べられたのですか。

小野田：危険なものには手を出さなかったですね。豚がほじった跡だとか鳥がつついた跡でだいたい食べられるものはわかりましたけれど、それでも草や木の実は食べませんでした。

肉の他にはバナナがありました。はじめのうちはバナナの皮は、こんなもの喰えるかっていうんで捨ててたんですが、牛肉とバナナだけ食べていると身体が熱くてどうにもならなくなる。だから皮も一緒に煮て喰おうということになる。皮は渋みが多いので、それをごまかすために今度はヤシのミルクを使う。ヤシの実を金具でおろして搾るとココナツミルクが取れます。まだ熟れていない青いバナナを皮ごと細かく輪切りにして、水でもみ洗いしてからこのミルクで煮込むわけです。肉とバナナとヤシのミルクの3点でバランスのとれた食事になったのかもしれません。今でも肉が好きです。

私は食事は一汁一菜でいいんです。豪勢な日本料理などは、胃がおどろいちゃうんですね、田舎者が新宿の交差点に立ったみたいに。長年の食習慣で、誰にでも自分自身にあった食生活というものができあがるのでしょう。

佐多：戦後30年といえば日本が高度成長期を経て急激に変化した時期です。日本に帰還されたときにはかなり戸惑われたと思いますが、まずどんなことを感じられましたか。

小野田：とにかく人間が怖かったですね。カメラの放列にしても、レンズが銃口に見えました。30年間祖国のために戦って、その祖国が敗れていたというやり場のない怒りと、変貌した日本で居場所のなさのようなものを感じて精神のバランスを欠いていたようです。

私の兄の格郎(ただお)は、戦後一回目の移民としてブラジルに住んでいたんですが、生きる目的を見失って虚脱状態の私を見るにみかねてブラジルでの牧場経営を勧めてくれました。ジャングル生活で牛は貴重な栄養源でしたから、その生態は観察してよく知っているし、熱帯の気候や風土も肌で知っているということで。

それで帰還後1年足らずでブラジルに渡り、眠る間も惜しんで死にもの狂いで牧場開拓に取り組みました。島で学んだことをブラジルで試すことによって、自分の30年間が無駄ではなかったことを証明したかったのかもしれません。ここでもまた身体が丈夫なことが効を奏しましたね。夫婦ともども病気をしなかったんです。隣り近所を見ても、夫婦のうちどちらか一人が病気をした方は失敗しています。そばに自分の兄弟も親戚もいない、ご近所といっても彼ら自身も開拓中。自分たちのことで精一杯で、人のことどころじゃないんです。

佐多：ルバング島での30年間の証明がなされたわけですね。

さて、質問をぐっと変えさせていただきますが、今の日本の状況を見てどう思われますか。

小野田：今の日本ねえ。根本的に無責任ということに尽きると思いますね。ほんとうに無責任

です。あるいはもっと極端にいうと、プライドがない。破廉恥ですよね。だから今のように汚職事件が後をたたない。

佐多：こういう状況を変えるためにどうしたらいいと思われますか。

小野田：落ちるところまで落ちなくてはだめでしょうね。そうなって初めて気づくんじゃないでしょうか。

私は戦後の教育が、こうなってしまった一因だと感じています。昔は教育勅語に示された「父母に孝に兄弟(けいてい)に友(ゆう)に」と先ず社会全体を考えることを教えられましたが、戦後は個人の時代といわれます。親より兄弟よりまず自分だなんて教えられますから、自分以外頼れるものといったらお金くらいしかない。だから今みたいにお金お金の世の中になってしまったのではないですか。

佐多：小野田自然塾（＊）を始められたのは、そんな思いがあったからですか。

小野田：きっかけは、ブラジルの邦字新聞で読んだ、大学受験浪人中の息子が就寝中の両親を金属バットで殴り殺した事件でした。昭和55年ですか。ほんとうにショックでした。

私に人さまの子供を教育する資格があるというわけではありませんが、私が自然から教わった体験を子供たちに伝えられればと思ったんです。それで59年の夏、初めて富士山麓で子供たちのキャンプを開いてこれを自然塾と名づけました。これが私の人生最後の仕事と思っています。

人間がたった一人で生き抜くつらさ、怖さ、友達と一緒にいることの喜び、生きるという意志の大切さ、などを教える場が少なくなっていますよ。親にもかなり問題があります。電話で子供を参加させたいと言ってくるんですね。指導者の資格はどうなっているのか、とかいろいろ細かいことを聞いてくる。しまいには、ご自身でなさったらどうですかと言いたくなります。そんなに心配なら自分で子供をキャンプに連れていけばいいと。

万一のことがあれば、自分の子供なら諦(あきら)めがつきます。よそ様の子供は諦めてくださいと言えません。親が心配している以上に、こちらのほうがもっと心配なんです。だから我々を信用できないのならご自分でどうぞ、と言いたくなります。キャンプが終わるともうクタクタで、目が見えなくなるくらい。寝ないでやりますからね。でも死ぬまで続けようと思っています。

佐多：自然塾で学んだ子供たちが、それを自分たちの人生でどう活かしてくれるか楽しみですね。

小野田：そうですね。最初のころの子供たちはもう社会人になって、学校の先生になって分校を希望している者もいます。阪神大震災で、小型テント、寝袋、食料をもって被災地に駆けつけてボランティアとして働いた子もいます。

ほんの少しでもいい、生きる目的をもつことの大切さや、生きることの素晴らしさをわかってもらえればと思います。これは大人もそうですが、今は死を意識しないで生きられる世の中です。ですが日本人はそれでかえって「生きる」ことをおろそかにしてしまっているような気がします。

＊財団法人　小野田自然塾
キャンプ場を中心にした、動物飼育を含む野外生活体験の場を設定・整備し、青少年及び一般人の野外活動指導、指導者及びボランティアの育成、心身障害者の野外活動の援助などを実施している。研究会・後援会等を随時開催。青少年の国際交流事業も計画している。
〒963-5522
福島県東白川郡塙町大字片貝字長久木364番地先
TEL:(0247)42-2311 FAX:(0247)42-2312

東京事務局
〒104-0045 東京都中央区築地2-15-15-505
TEL:(03)3545-2051 FAX:(03)3545-2052

参考ビデオ
小野田自然塾『自然に生きる』シリーズ（文部省選定）
4本セット ¥18,500
『自然に生きる・続編　野外指導者養成への道』
4本セット ¥38,000
申込先：フォーラムインターナショナル株式会社
TEL: (03)5485-1171

小野田ご夫妻と